

妊症に於ける卵巣卵管障害、更には経度の癒着剝離、試験組織診の可能性等診断の確定、治療方針の確立に試験的開腹に代るものであり又患者に対する侵襲も少ない点、今後更に広く応用さるべき価値の高いものである事を強調したい。

5. 婦人科領域における腹腔鏡の応用について

(北農病院) 後藤 史郎

婦人科領域における補助的診断法の一つとして腹腔鏡の応用を試みた。その中から、性器結核疑の患者の下腹痛が、骨盤のうつ血と癒着によるものであることを認め

た例、広汎な癒着の予想される患者の癒着の位置と程度を術前に知ることにより手術を円滑に進めた例、排卵や黄体を観察して不妊症への応用を示唆された例、卵巣腫瘍や腹水を確認した例、原因不明の腹痛が、二次性月経モリミナによることを診断した例、など幾つかの症例を示し、婦人科領域における補助的診断法としての、腹腔鏡応用の意義について考察を加えた。腹腔鏡の有意な点を利用することにより、婦人科領域の診療内容を大いに充実させうるのではないかと考えている。

第2群 内 分 泌

6. 産婦人科領域の Triosorb による甲状腺機能検査 (第1報)

(信大) 岩井 正二, 福田 透
清水 勲, 古田 孝文

甲状腺機能検査法には現在迄多数の方法があるが、最近更に ^{131}I 標識 Triiodothyrosine Resin Sponge による検査法が発表され各方面より注目されつつある。本法は特に放射性汚度を被検者に直接投与しないで実施できる点に大きな利点を有し、妊婦等が対象となり得る我が領域では真に好都合な検査法であるが、我々も信大産婦人科に入院或は来院せる各種患者 184名 (妊婦93例、切迫流早産20例、不妊症20例、等々) に就き本法を試行したので、現在迄の成績に就き報告する。

即ち妊婦では一般に妊娠3カ月後では対照に比し低値をとるものが多いが妊娠月数とは特に関連性はなく、中毒症例では正常例に比し更に低値を示す例の多い事を認めた。

切迫流早産例における本検査の応用価値に関して今後更に慎重なる検討を要するものと考えられた他、不妊症例では特に対照と著差が認められなかつた事等も興味深い事と思われた。

7. Gonadotropin 負荷試験による尿中 Estrogen 分画値の動揺と月経異常の治療について

(阪大) 足高 善雄, 倉智 敬一
青野 敏博, 宮田 順

月経異常婦人の病態を内分泌学的にうかがう目的で、各種月経異常婦人47例と正常月経婦人4例の計51例に月

経又は出血の4日目より PMS 2000 I.U. と HCG 1000 I.U. を連日3日間投与した。投与前日の24時間尿より estrogen (E), pregnanediol (PG), total gonadotropin (total G), 17-OHCS, 及び 17-KS を測定し、投与開始後の各24時間尿より E, PG. を測定した。

尿中 E は G 投与開始後6日目 (第6尿) にピークを示して増加する例と、全く増量を示さない例に分類でき、第6尿のE値より $40\mu\text{g}$ 以下を無反応型、 $41\sim 60\mu\text{g}$ を低反応型、 $61\mu\text{g}$ 以上を正常反応型と定めた。月経異常の種類別に無反応型の占める率の多いものから並べると機能性出血—無月経—無排卵性月経—正常月経の順となる。

E の分画比即ち estriol + 16-epiestriol/estradiol + estrone 比はG負荷後に正常反応型のみが低下の傾向を示した。

種々の治療により正常反応型の14例中12例が排卵し、うち5例は妊娠の成立をみたが、なかでもG療法により11例中9例に排卵の誘発をみた点が注目される。一方無反応型は治療により10例中2例が排卵を来したのみで、G療法による排卵誘発率も低かつた。

以上より、G負荷試験は卵巣機能検査法として有用であり、本試験により正常反応型と判定された例はG療法の適応となることを明らかにした。

8. 合成 Gestagen の線溶現象に及ぼす影響 (名大)

石塚 直隆, 川島 吉良, 加納 泉
寺尾 俊彦, 竹内 忠倫

機能性子宮出血に対し止血効果をもたらす合成 Gesta-